

近世後期における紅花流通と城下町商人の存在形態

——最上紅花問屋佐藤家を中心として——

横 山 昭 男

一、はしがき

羽州村山地方の近世における紅花生産と流通の展開において、注目すべき画期的な変化の一つは、明和・安永期以降、農村内部に干花加工製造が導入されたことである。それまでの干花加工は、主として城下町や在郷町の問屋や仲買人の手で行なわれていたことから、そこに市場関係の變化がもたらされた。つまり地主・富農層は、干花加工を行なうとともに干花を買集める在郷仲買（商人）として発展し、旧来の町方中心の流通ルートを突きくずしていったといわれている。

ところで、半加工品としての紅花は、京都を唯一の需要地として移出されたが、その流通過程、つまり京都紅花問屋および産地の紅花集荷問屋による流通あるいは生産支配

の問題を分析した研究は極めて少ない。嘉永三年の記録に「紅花荷物例年、村山一郡凡千駄余も駄送之内、八分通へ山形へ出荷ニ而云々」とある^①。この数量はその史料の性質から全面的には信じ難いが、ともかく大部分の紅花の集荷が、まず城下町商人の手に占められていたことを示している。この城下町紅花問屋が、紅花の遠隔地取引の上でいかなる存在形態をもっていたかを明らかにすることは、村山地方の農村経済の発展の様相を考えるためにも重要な視点であろう。

ここでとりあげる山形の一紅花問屋佐藤利兵衛家は『東講商人鑑』（安政二年刊）には「繰綿太物卸店」と記されているが、幕末の山形藩（水野氏）の土格御用達五人衆の一人であり、同藩への多額の献金によっても知られるように、幕末の山形城下町有数の一豪商であった。小稿は、佐

藤家に残存する紅花関係の史料を中心に、主として京都紅花問屋との取引形態および集荷問屋佐藤家と買次問屋兼仲買人などとの関係を考察することによって、近世後期における城下町紅花問屋商人の存在形態および遠隔地商業におけるその位置を明らかにしようとする一つの試みである。

注① ここには、とくに先駆的な業績として、安孫子麟「幕末における地主制形成の前提―市場関係の歴史的吟味―」（歴史学研究会編『明治維新と地主制』所収）。

渡辺信夫「江戸時代後期における農村市場の形成とその構造」文化第二三巻第二号、をあげておく。

② 住吉英作氏蒐集文書、「乍恐以返答奉申上候」山形市史編集資料第三号所収。

③ 佐藤家は、寛永年間佐藤九良右衛門を初代とし、第六代目利右衛門の宝暦十二・十三年頃には、京問屋の仕入金による城下町買次問屋であったことが知られる（今田信一「紅花流通機構の改革問題とその矛盾性」〔山形県の歴史と考古』所収）。幕末の五人衆とは佐藤の外、長谷川吉郎次・同吉内・村居清七・福島治助のことであるが、慶応三年山形藩が御用達など主な山形商人に七万二、〇〇〇両の調達を申し入れたとき、佐藤家は一万両の割当をうけている（山形経済志料第六輯・復刊合冊本、三九六〜七頁）。

以下の史料は、とくにことわらぬ限り、佐藤家文書は、現山形市十日町佐藤利兵衛氏所蔵、また最上屋喜八文書は、山形大学図書館所蔵のものである。

一、城下町紅花集荷問屋と京問屋

最上紅花は、明治初年の記録によれば、需要地京都への全国からの移入額のほぼ半ばを占め、村山地方はその紅花の主産地としての名声を博したことは周知のことである。ところで、紅花生産は、干花加工の農村内への導入によって飛躍的にその生産を増したが、需要地が終始京都に限られ、遠隔地取引であったことは、必然的にその流通ないしは生産も、京都紅花問屋およびその市場の強い影響下に置かれる一側面があったと思われる。

ここではまず、京都問屋がどのような方法で最上紅花を集荷したかをみていきたい。近世中期における紅花流通の中心問題は、享保二十年に、京都紅花問屋十四軒仲間が結成され、京都紅屋（一四八軒）は必ず問屋仲間から紅花を購入することとなって、産地の直買を禁ぜられたため、これをめぐって生産地の荷宿・仲買商人および生産者が、仲間制度による独占廃止運動を展開したことに集約的にみることができる。そこでは、京都紅屋および問屋商人の手代

などが、競って産地から直買をするという状態がなくなり、城下町あるいは在郷町の一部の紅花集荷問屋を通して、京都問屋仲間に出荷するか、あるいはかれらの仕入金によって取引するかの形態に限られたのであろう。しかしこの独占に対する抵抗は、干花加工の農村導入が広がるとともに高まり、特定の城下町や在郷町の花市が衰微するという事情のもとに、明和二年、ようやく廃止となった。

ところでその後、近世後期の紅花流通には、産地商人と京問屋との間に、どのような取引形態がみられたであろうか。そこには四つの形態、つまり、「直買」（産地買い）、「注文取引」、「相対買」、「任買」があったとみられる。

「直買」は、主に城下町や在郷町の紅花買次問屋あるいは仲買商人を荷宿として、京都・大阪・江戸などの遠隔地商人がその手代や買役を派遣して紅花を集荷し、荷主として「国元」へ輸送する形態で、通手形にその多くをみる事ができる。これは「注文取引」の場合も同様であるが、運賃・諸役・諸掛りなどの諸経費は問屋商人負担であり、いわゆる仕入問屋の「自分勘定荷物」として、仕切状による「相対売」などと区別されている（くわしくは後述）。前二者の中でも、近世中期以降とくに遠隔地取引において、都市商人の前渡金あるいは仕入金による産地支配が展

開するといわれている。紅花においても、中期においてはその傾向を増したと思われるが、それが近世後期になって一層発展したとは必ずしもいえない。

城下町問屋あるいは農村の仲買人などが、京問屋の荷宿として紅花購入の拠点となっていたが、かれらはまたみずから紅花を集荷し、荷主として上方問屋宛に出荷していることも、多くの出判手形に見ることができ。しかし多くの在方仲買商人が、近世後期になると、従来の城下町や在郷町の有力問屋の商圏を分割し、荷主として独立したということを安易に認めることはできない。つまり、最上紅花の遠隔地取引における、京問屋・町方問屋商人と在郷中小商人との間の流通上の関係を、もっと検討してみる必要があるということである。

ここではまず、山形城下町問屋佐藤利兵衛家に残存する嘉永七年の「紅花仕切帳」から、佐藤家の紅花の集荷とその取引についてみていきたい。この仕切帳には、取引物資として紅花の外青苧もみられるが、これを整理・集計したものが第1表である。これによれば、荷受問屋の数は京都紅花問屋伊勢屋源助など一三名にのぼる。またこれらの仕切限月は九月～十二月が大部分で、三月切りが数件あるが、ほぼ一年分の紅花仕切分とみられる。第1表の仕切件

第 1 表 嘉永7年、佐藤家の紅花仕切高

荷 受 問 屋	仕切件数 (回数)	駄 数 (64袋1駄として)	代 金		歩引、諸掛、 駄賃その他	
			金	銀	金	銀
伊勢屋 源 助	5	紅花駄袋 40.35	2,261.32	74.65	両 36.20	匁 19.44
伊勢屋 利右衛門	3	16.41	884.10	33.23	16.32	35.32
綿屋 勇 藤	4	18.9	1,049.30	50.12	16.02	23.42
最上屋 喜 八	3	6.51	320.00	12.18	4.22	10.69
岐阜屋 八郎兵衛	2	10.28	594.10	17.31	10.00	10.07
吉文字屋 彦 市	3	3.50	184.22	6.56	2.22	8.75
西村 清九郎	2	6.10	345.30	3.75	5.20	17.21
近江屋 次右衛門	1	2.36	148.10	5.62	2.12	7.50
若松屋 喜十郎	1	1.6	57.32	5.62	0.30	7.17
嶋屋 清兵衛	7	21.52	879.32	38.40	8.32	186.04
河内屋 藤兵衛	2	3.36	154.20	7.49	1.12	37.35
認屋 久三郎	1	2.27	139.10		2.02	5.15
佐藤 利右エ門		3.10	176.02	5.62	3.03	17.61
小 計		紅花駄袋 137.7	7,196.12	260.55	両 110.33	匁 385.72
吉田 勘兵衛	子丑分	青亭 13個	128.12	匁 6.5		
菱田 清兵衛	子寅分	23ヶ	194.21			
墨屋 小右衛門	子 分	4ヶ	40.00			
ゑひすや 清 助	寅 分	1ヶ	8.12			
平 七		紅花駄袋 28.11	1,744.20	匁 38.90	両 26.02	匁 3.13
々		28.30	1,685.20	42.13	25.10	2.58

注 佐藤利兵衛家文書「紅花仕切帳」(嘉永7年)。

数は、「九月晦日切」「十月切分」などの回数を示し、駄数や代金はそれを合計したものである。次に問屋別の取引総額では、まず平七が、約五六駄一袋、その代金三、四三〇両三分と八一匁〇三でもっとも大きく、つぎは伊勢屋源助が四〇駄三五袋で、代金二、二六一両三分二朱余、綿屋勇蔵が一八駄九袋で、一、〇四九両三分余と続いている。取引額の差は極めて大きい。嘉永七年の取引総額は約一九三駄に上り、その仕切代金の総額は、歩引および出荷輸送のための諸経費を差引いても、一万〇四六八両余に達しているのである。

ところで、のちの記載様式からもわかるように、これらがすべて佐藤家の商標(令)で出荷されているのではない。嘉永七年の「紅

第2表 佐藤家扱、商標別・荷受問屋別出荷数

(単位袋)

荷受問屋	商標	全	㊦	⊕	⊖	田	田	㊦	国	圭	金	㊦	因	因	三	
1伊勢屋 源 助		452	320	79	92	888	87	82	204	391						2,595
2伊勢屋利右衛門		145		212	81	307		140	160							1,045
3綿屋 勇 蔵		503	84			250		244	85							1,166
4最上屋 喜 八			72	64		114		101	84							435
5岐阜屋八郎兵衛			72		95	353				80		68				668
6吉文字屋 彦 市		83		74				85								242
7西 村 清九郎		78	76		80						80	80				394
8近江屋次右衛門			84			80										164
9若松屋 喜十郎		70														70
10嶋 屋 清兵衛		153	238	69		114		87				67	668			1,396
11河内屋 藤兵衛			72			70		86								228
12総 屋 久三郎		80												75		155
13佐 藤 利右衛門				200												200
14団 平 七		612	885		184	1,673			154							3,508
合 計		2,176	1,903	698	532	3,849	87	567	791	545	80	80	215	668	75	12,266

注 佐藤家文書「紅花仕切帳」(嘉永7年)、上の商標のうち、その所在地や商人名が知られるのは、⊕が佐藤利右衛門(佐藤利兵衛の分家)、圭が岩瀬屋太惣治(山形)、国が吉田勘右衛門(楯岡)、㊦が枡屋半左衛門、⊖長崎屋久右衛門(左沢)、田端屋孫七(長井宮)などが判明するが、これも全部は正確を期しがたい。

「花仕切帳」には、第2表にみられる通り、佐藤利兵衛家を含め、一四の商標(荷印)がみられる。これら荷主的性格をもった商人の所在地は、いままてを明らかにすることはできないが、単なる仲買人ではなく、城下町や在郷町などの第二次的買次問屋とでもいふべきものではないかと思われる。一四の商標中最大の出荷数をもつ田という商人は、「仙随」・「仙一」・「仙王」・「仙紅」などの品名の紅花を扱うところから、仙台領の紅花商人かと思われる。商品名は多数にのぼるが、商標をもつ買次商人の取扱品名はほぼ一定しており、例えば佐藤利兵衛の取扱っている品名は「幕之内」・「紅輪」・「猩々」・「天下一」・「大將」などである。佐藤家は自からの農村の仲買人を通じて集荷した紅花のほか、これら在方の二次的買次商人の委託販売あるいは請負的な販売を行っていたものとみられる。嘉永七年に名目上佐藤家を荷主として出荷した紅花の総額は一九〇駄余であるが、そのうち佐藤家が直接仲買人を通して集荷した

紅花は、二、一七六袋（約三四駄）で、全体の一七・七％に過ぎないのである。^③

そこで、これらの多量の紅花の集荷を、紅花集荷問屋および買次問屋である佐藤家が具体的にどのような形で京問屋と取引していたのかを、さきの「紅花仕切帳」と単独の「仕切状」記載の様式の中からみていくことにしたい。まず「紅花仕切帳」によって、伊勢屋源助の十一月の仕切分をみると次の通りである。

伊勢屋源助殿

十一月切分

一、田仙随一

⑦

廿一入 四丸

内老袋熊紅

引メ七拾丸

八拾老兩かへ

代金九拾九兩三分貳朱

六匁五分六リン

一、田仙熊紅

⑦

廿八 四丸

外ニ老袋

仙随一詰合

メ 八拾老袋

七拾八兩かへ

代金九拾八兩貳分貳朱

五匁六分三リン

布彦

一、今大將

廿八 老丸

十九入 三丸

メ 七拾六袋

六拾三兩かへ

此代金七拾五兩三分

貳匁八分老リン

一、今天下一

⑦

十九入 四丸

メ 七拾六袋

六拾五兩かへ

此代金七拾七兩貳朱

三匁七分五リン

一、田仙錦

全

廿一入 四丸

外ニ 貳袋

メ 八十六袋

七拾三兩貳分かへ

此代金九拾八兩三分

九分三リン

一、田仙緋

⑦

廿一 四丸

外ニ 十袋

メ 九拾四袋

七拾兩貳分かへ
此代金百三兩貳分

二匁八分セリン

メ金五百五拾三兩貳分貳朱

貳貳匁四分八リン

内金八兩壹分ト

歩引

三匁五分九リン

又金 貳分也

全 大將 四丸

田 仙錦 四丸

メ 二口世話料

引

メ金 五百四拾四兩三分貳朱

拾八匁八分九リン

すなわちこれによれば、それぞれ（品名）によって値段が異なり、ここでも一駄八一兩余から六三兩までみられるが、また時期によっても相場が変動した。しかし干花出荷期は七・八月であるが、仕切限月のほとんどが十月以降で、翌年の正月・三月あるいは五月になっている仕切があるのは、京問屋が紅屋などへ完全に販売が済んだのちに、その代金を荷主である佐藤家に決済するのが原則であったことを意味している。さきの史料によれば、佐藤家の商標今印の外に田印があり、品名も田が四点、今が二点となっ

ているが、代金はもちろん六件の合計から歩引・世話料などの諸経費を差引き、十一月切全体の請取金額を出している。つまり、商標がちがう委託販売の紅花も佐藤家を荷主として取引され、決済されているのである。

以上のような仕切の記載が、他の紅花荷受問屋の場合も普通であるが、伊勢屋源助の荷受の欄の中で、月切の仕切の外に、「空印支配分」というのがあり、空印紅花がまともに記載され、その代金二二九兩二朱余というのがある。佐藤家の仕切に入っているのは、他の委託販売ともちがったやや特別の扱いをうけたものと解される。また数人の問屋商人が共同で販売する例もあった。

次に紅花集荷問屋佐藤家の京問屋との取引形態を、佐藤家および佐藤家の取引先の一つである、京都紅花問屋最上屋喜八の仕切状によってみていこう。佐藤家に残る単独の仕切状は、弘化元年のもの四通、弘化二年のもの八通、明治六年と十年のもの四通で計一六通だけであるが、それと、文政年間から幕末までの最上屋家の仕切状をみると、仕切にも一応二つの形態があったことが知られる。その一つは「相対売」であり、他は「任荷物売」の形式である。そこでまずここに、その二つの例を史料によって示しておきたい。

(1) 仕切^③

金六拾五兩がへ

一、金 貳百五拾貳兩 半仙大一 廿一入一 五九

三分貳朱ト 廿八入四

銀九分三リン 同仙二木 廿一入六 七九

右之内

一、金 三兩三分ト 相對を以

銀 貳匁六分 壹歩半引

一、金 三分ト 右目欠引

銀 三匁四分四リン

一、金 貳分也 金鯁印

口せん

引メ金 貳百四拾七兩三分ト

銀 貳匁三分九リン

右之通相対を以、買請、書面代金隨ニ相渡此表無出入相済申候、
万一算用違・拔袋・違花等御座候へへ、御平ニ重而指引可仕
候、為後日仍而如件

弘化二己年三月二日

佐藤 利兵衛殿

徳五郎殿

吉文字屋 彦 一 ④

(2) 仕切^⑤

十一月卅日限

五拾三兩かへ正ミ

一、金七拾九兩貳歩也 全兩揃印 十九入 三九七拾

内金 壹歩貳朱ト 三匁六分ハ 手板不足 同宮大印

金 六拾三兩也 請取 廿八 一九 十貳拾

メ 壹匁 片馬

差引

金拾六兩ト三匁八分貳リン

右之通任、荷物売、附代金不殘隨ニ請取、此表無出入相済申候、万
一箇荷之内拔袋・違花、亦是算用違等有之候得は、重而御差引
可被成候、為後日仕切依而如件

文政十二丑十一月晦日

佐藤 利兵衛

宇兵衛

(1)の仕切は、京問屋吉文字屋が佐藤家にだした「相対売」
の例であり、(2)の史料は、荷主佐藤家が、京問屋最上屋にだ
した「任売」による代金請取の仕切である。一般に「相対
売」とは、売り手の荷主と買手の荷受問屋が相方立合の上
に売買値段を決めるものであるのに対して、「任売」とは、
荷受問屋に販売値段の決定が任され、問屋の見込で売捌

くことのできる取引形態であると解されている。(1)の史料によると、佐藤家の荷印をもつ二種類の紅花二四九袋(六四袋一駄とし
て三駄五七袋)の代金が一駄六五兩の売値であることから、二五二兩三分二朱と銀九分三厘となっている。これから一割半の歩引、その他欠引と一部紅花についての口銭の合計五兩と銀六分余を差引き、その残金を三月二日にわたしたというものである。「任売」の場合も、産地荷主が運賃その他の諸経費を負担するのは、「相対売」の場合と同様であるが、値段の決定が荷受問屋に任かされていることから、当然荷受問屋の利潤も大きく、仕入問屋の機能に近い効果を果したと考えられる。仕切状の記載様式は、すべて(2)のような形式をとるとは限らないが、「手板添金不足」分が代金から差引かれている場合が多い。手板添金は、運送途中の運賃・藏敷賃などの諸経費として、荷物とともに産地荷主がだしたものである。これが「相対売」には少く、「任売」にはほとんどでているのは、荷受問屋に現品販売の代価が全く依頼されていることも関係があったのではないかと考えられる。

また歩引きは「相対売」に必ずあるのに対して「任売」にはほとんどない。「相対売」の歩引きは一半半(一五%)に一定しているが、これは荷受問屋の口銭化したものとみ

られ、荷受問屋の仲買あるいは紅屋への販売値段が荷主への支払代価とは同じであるとき、その利益は口銭のみであることはいうまでもない。「任売」の場合でも、荷受問屋が紅屋あるいは仲買人への販売値段と荷主への支払代の差によってその利益の大小が生ずるが、仕入代金を先に決済し、その後相場を見計らって高く販売することができれば、仕入銀などによる注文買いに近い利潤算出の方式を作ることが可能となるわけである。史料(2)にある仕切代金のうち「金六拾三兩也 請取」とあるのは、月日は不明であるが仕切月日の前に荷主佐藤家が代金の一部を受取っている。このように、仕切限月の前に荷受問屋が荷主に代金の一部を送金することは「相対売」の場合にもあるが、その際荷受問屋は、限月までの間の利足を、荷主への支払代金から差引く仕組になっているのである。したがってこれは先払いということで、仕入銀による産地買い、あるいは注文取引のような隔地間の価格差を利用しての利潤獲得というものではないが、荷受問屋の確実な収入の道であったことはいうまでもない。

このように、取引における佐藤家のような荷主問屋の利潤の基礎は、京問屋への販売代金から、仕入代金と輸送のための諸経費を差引いた残りということになる。仕入代

金には、手付金などによる仲買人を通して直接集荷したものと、第二次的買次商人からの委託品仕入代などがあつたことは先にものべた通りである（くわしくは後述）。

ところで産地荷主あるいは紅花集荷問屋は、販売先である京都の特定の間屋と固定的な關係をもつて取引してゐたのではないようである。そしてまた、仕切状による二つの形態のうち、「相対売」に対して「任売」は極めて少ない。佐藤家に残存する一六件の仕切状の中で「任売」は一件にすぎない。このような傾向は、京都の荷受問屋最上屋の佐藤家との取引についてもみられる。文政年間から嘉永年間における最上屋の仕切状をみると、四六件中「任売」は二件にすぎないのである。

もちろん京問屋の紅花取引にも、以上のような産地荷主の送り荷に対して、みずからの手代の派遣などによつて産地で紅花を購入し、または仕入銀による注文買いを行ない、仕入問屋としての活動を展開してゐたことは先にもみた通りである。最上屋もこれらの両方の機能を同時にもつてゐた。最上屋の紅花取引の全体におけるその割合を、「荷物高合帳」によつて、天保四年から十三年についてみると、天保八年はその最高で、総荷受代金一万一、八九四両余のうち、仕入問屋として集荷した「自分勘定荷物」は、二、三

第 3 表 京問屋最上屋喜八の総荷受高と「自分荷物」

		A 総荷受高	B 自分荷物	$\frac{B}{A} \times 100$	羽州紅花	長谷川吉郎 次分
		両	両	%	両	両
天保	4	12,687.01	732.11	5.8	4,194.11	2,645.30
	5	10,858.21	425.12	3.9	3,879.30	3,095.22
	6	10,551.23	1,891.21	17.9	4,970.20	3,312.32
	7	4,867.12	941.32	19.0	2,884.02	2,633.20
	8	9,839.32	2,336.20	23.7	5,260.31	4,493.03
	9	9,338.13	1,954.30	20.9	5,885.20	4,185.22
	10	10,631.32	833.13	7.8	4,381.02	2,920.10
	11	17,687.30	1,547.22	8.7	6,004.11	5,098.32
	12	18,285.13	1,887.32	10.3	10,040.02	7,682.03
	13	13,876.11	316.10	2.3	7,852.20	6,908.31

注 最上屋文書、「仕切帳」と「荷物高合帳」、(大場洋子氏の集計をもとに作成)。

三六兩二〇余（全体の二三・七％）、また最低の天保五年は、四二五兩一二余（三・％）となっており、一〇年間の「自分勘定荷物」の平均は約一二・一％となっている。

以上のことから、紅花流通においては、中央都市商人の仕入銀による注文取引、あるいは産地買いは、産地荷主の出荷量に比して意外に少なかったといわざるをえない。これは量の割合に高価であり、年によって生産量の多小が甚しく、そのためまた価格の変動が激しかったという理由もあるであろう。また干花という半加工品で、輸送における濡荷・海難などの損害が予想外に大きかったこともあったと思われる。しかしこれは必ずしも紅花に限ったことではない。ともかく近世後期における遠隔地京都との紅花流通において、その集荷問屋あるいは買次問屋としての山形など町方問屋の勢力およびそれが占める比重の極めて大きいことは注目すべきであろう。

注① 『農務局録事』九六号所収、「京都府下紅商組合答申書」

によれば、幕末の最盛時の京都への紅花入荷数量二、四〇〇駄余のうち、最上物（庄内・秋田も含む）は一、二〇〇駄とあり、これは敦賀経由となっている（山形市史 中巻六五六頁）。

② 山形市史 中巻 五五六～五六一頁、第三章第二節2、城

下町商業の統制（拙稿）。

③ 通手形には、例えば次のような例がみられる。二藤部文書「諸方出判写」（山形市史編集資料第一三三号）。

一、紅花四駄
正味九貫五百目入 九箇
九貫目入 貳箇

八貫五百目入 五箇

右者京都之八郎兵衛と申者、御当所ニ而相調国元へ持参仕候間、大石田出口御判可被下候 以上

宿 十日町

（天保十年）
亥 七月十一日

理 兵 衛

表書之通相違無御座候、御通可被下候 以上

山形役所

大石田御役所

④ 豊田武・児玉幸多編『流通史』一六七～一七〇頁。ここでは元禄期における初期商人と新興商人の問題を、木綿問屋の場合について、荷受問屋から仕入問屋への移行という点から述べている。森岡美子氏は享保十四年の和糸絹問屋の記録を分析して、「前貸を要さぬ奥州、荷主のなかばが前貸を求める上州に対して、最も多額の前貸を必要としたのは美濃・飛騨・近江・丹後であった」とし、その都市問屋資本の投下の条件を、在地の買次問屋の成長の度合に対応していたとみている（荷受問屋資本の生産地投下の諸形態―京都和糸絹問屋の場合―『史学雑誌第五十九編第一号』）。

⑤ 佐藤家の出荷先である京問屋の系譜を、「諸問屋再興調」

七(『大日本近世史料 諸問屋再興調 四』所収)によつてみると、「紅花撰方仲間」と称し、「古来より紅花引請候仲間」

(第2表の1、2、6、7、8、9)とはすべて關係をもち、

「近頃商売相始、撰方仲間江加入いたし候」六人は、嘉永七年の仕切帳には一人もみられない。しかし「同所系問屋」で

「紅花荷物付商ひいたし候」綿屋勇藏・岐阜屋八郎兵衛および美濃屋忠右衛門、また「紅花荷宿」といわれていた最上屋喜八・近江屋佐助とはいずれも關係があつた。

⑥ 佐藤家の残存資料には、佐藤家の買子・仲買人を通しての干花買入帳あるいは仕入帳がないので、その直接の分析はできない。その問題点などは第三節に示した。

⑦ 佐藤家文書、史料は、「④紅花売仕切、全④金三人仲真」とあり、一駄五五両かえの紅花二〇二袋と四八両かへの紅花四袋で代金合計、一七六兩二朱と五匁六分二厘となるが、これから、一兩三朱余の歩引のほか、藏敷・水揚・目欠引・江戸より運賃など三兩三朱と一七匁六分一厘を差引いた残金一七二兩二朱余を、全佐藤利兵衛・④佐藤利右衛門・金紅屋久兵衛で平等に三分している。また最上屋仕切帳にみられる「工藤六兵衛・支配人伊藤仁八」(ともに天童)、「喜早伊右衛門・支配人吉田勘右衛門」(ともに榑岡)、「吉田勘右衛門・代佐藤卯兵衛(榑岡と山形)などの記載は、共同販売あるいは代理人關係を示していると思われる。

⑧ 最上屋(井山喜八)は、「諸問屋再興調」七によれば、近

江屋佐助とともに「此二人者、従古来紅花荷物之荷宿と唱候よし」とあり、おそらく中期には荷宿商人として認められたもので、化政期以後に著しく發展した紅花問屋と思われる。

山形大学所蔵の史料も文政十一年の「仕切帳」がもつとも古い(工藤定雄「最上屋紅花史料の整理によせて」山大歴研月報第八十一号)。

⑨ 佐藤家文書。

⑩ 最上家文書、「仕切帳」(文政十二・天保四)。

⑪ 宮本又次著『日本近世問屋制の研究』第三章 問屋の取引形式。

⑫ 「相對売」の仕切状の記載に「塩津掛り物」「大津掛り物」「大阪々京都迄駄賃」あるいは販売の「世話料」などの諸掛りがあるのもあり、このような場合は少ないが、手板添金という形をとらなかつたのであろう。

⑬ 「任売」は、荷主の送り荷で、運賃・諸経費の負担は荷主に属するが、自己の計算で売価が決められるという点では仕入問屋に近い側面もある(前掲宮本又次著)。そこで「歩引」があるものと、ないのがあるものであろう。

⑭ 最上屋文書、「仕切帳」(天保四・十三)。

仕切

三月節句限

一、金 六拾五兩三分

金四拾九兩替
金紅井 十八入巻
十七入四 〆五丸

右之内

金三分式朱ト六匁七分六リン 分引

二月朔日

金六十四両也

金 式分ト七分式

請取

右一ヶ月利足

さし花入リ

外ニ

三五かへ直引

指引残金三朱ト壹匁六分

右之通相對を以売渡代金髓受取……(下略)

天保十一年

庚子三月二日

佐藤 利兵衛

弓 吉

⑮ 大場洋子「最上紅花流通史の研究」昭、四五 山形大学教育学部卒論、なお「自分荷物」は「仕切帳」にはなく、「荷物高合帳」にのみでてくる。高合帳は、一年を春(正月～七月)と秋(七月～暮)の二箇季にわけ、各箇季に「買請」荷物と売残荷物のすべてをかきあげ、売先・売値を明記して利益計算したものである。そこでの「自分荷物」は、出荷先の日早口銭・袋代・荷造代・宿口銭・運賃・役金・為替諸掛りなどのすべてを荷受問屋が負担したものである。

三、城下町問屋と在方荷主および

仲買商人

前節では、城下町商人佐藤家の京問屋との取引形態を問題にした。ところで佐藤家は、どのようにして農村から紅花を集荷し、また第二次的買次商人あるいは仲買人との関係を結んでいたのかを明らかにする必要がある。とくにここでは史料の關係から後者の問題を中心にみることにしたい。

在方商人が直接荷主として京問屋と取引する場合もあったが、それは最上紅花の京都移出量の全体からみれば、城下町および在郷町の紅花集荷問屋あるいは買次問屋の取扱量に比して極めて低い割合のものであったと思われる。例えば、京都紅花問屋最上屋の天保年間の紅花買入元金高を「仕切帳」および「荷物高合帳」によってみると、羽州荷主からの買入高は、最上屋の総買入高の約半分で、約四、〇〇〇両から一万両余となっているが、そのうち長谷川吉郎次分が約六〇％から九〇％を占めている状態である。この年間に取引荷主としてあらわれる村山地方の商人数も、判明する限りではあるが、山形が圧倒的に多く二三人、天童四人、楯岡二人、落合・沢畑・左沢・谷地・長瀬各一と

なっている。^②
 また弘化三年
 嘉永元年の
 「仕切下書帳」
 によって、最上
 屋が村山地方か
 ら買入れた産地
 荷主をみると、
 江俣村・落合村
 など一部在方商
 人との取引もみ
 られるが、ほと
 んどは山形・天
 童・楯岡・谷地
 の城下町・在郷
 町商人であり、
 中でも先の山形
 の長谷川家が、
 最上屋荷受分の
 約七〇%以上を
 占めていること

第 4 表 京問屋最上屋と村山地方の荷主商人

			弘化 3 (午)		弘化 4 (未)		嘉永元 (申)	
			買入量	金 額	買入量	金 額	買入量	金 額
			駄 丸 袋	両	駄 丸 袋	両	駄 丸 袋	両
山形	長谷川 吉郎次	127.2	96,544.02	94.0.18	3,826.10	97.3.03	3,570.30	
	〃 佐 藤 利兵衛			8.0.16	303.00	5.2.7	181.22	
	〃 福島屋 治 助	5.0.0	180.30	11.0.11	395.00	1.0.16	38.00	
	〃 市村屋 五郎兵衛	2.1.12	122.30	5.2.0	208.20	3.0	26.20	
	〃 高 橋 伊之助		41.00					
天童	工 藤 六兵衛	1.0.16	39.10	6.0.16	201.22	1.0.16	26.20	
楯岡	吉 田 勘兵衛	12.1.9	474.32	(川口, 田中, 窪沼分含む)				
	山形 紅 屋 久左郎)	4.0.3	139.10					
< 附 込 >								
山形	長谷川 吉郎次)		608.22					
	〃 大沼屋 正 八)							
	〃 市村屋 五郎兵衛	19.19	248.22					
	〃 三浦屋 権四郎	4.	68.22					
	〃 三浦屋 外	外2名 4.	61.12	外1名 9.33	106.22	外1名 2.16	32.10	
〃	高橋屋 伊之助	8.	91.02	3.20	52.22			
谷地	浅 黄 善 吉	14.	227.10			2.2	28.00	
楯岡	尾張屋伝九郎, 支 配人吉田勘兵衛	10.	141.10					
江俣	鈴木長四郎 外1名	9.19	121.02					
落合	村田久藏(江戸)			11.	181.20			
〃	佐 藤 兵 助					9.	72.10	
〃	佐 藤 兵左衛門							
山形	八百屋勘七 外1					5.	47.20	
〃	福島屋 治 助					4.	35.22	

注 最上屋文書、弘化3,「仕切下書帳」,決算期を春(盆前)と秋にかけていることから、各年度はそれを合計しているが、嘉永元年は、春分のみで、秋分のないものもある。代金額の合計は、歩引、諸掛りを差引いたものである。銀分は略した。これらの総額は、仕切による最上屋の紅花集荷分であり、また村山地方関係以外の京都・江戸・仙台・近江・武蔵・下総・水戸などの商人分は省略している。買入量は、20袋=1丸,64袋=1駄として概算した。

がわかるのである（第4表）。佐藤利兵衛家は長谷川家に比べれば断然少ないが、このことは最上屋が佐藤家の主要な荷受先でなかったからであることは、第2表によっても知ることができる。

町方商人とくに城下町商人が、大規模な紅花荷主として京間屋に出荷しているということは、農村の小商人および仲買を買子として近在の紅花を広く集荷するとともに、第二次の買次商人を系列化し、大量の委託販売を行なっていたことによるのである。この点は前節でも佐藤家の場合についてみたが、さらにやや具体的な関係を示す史料からみていきたい。

為船替金請取手形之事

一、金六拾七兩

但シ文字歩判也

此引当最上紅花五百目袋

善 五九 廿八 三
紅 五九 十九 入 二

右之金子此度貴殿が京都室町伊勢屋源助殿為御登置紅花荷物相渡ニ、為船替取組書面之金高値ニ受取借用申、処実正ニ御座候、右代金当十月晦日限り京都伊勢屋源助殿が、為船替引当荷物引替無相違相渡可申候、万一日限延引仕候へ、右荷物貴殿ニ而御自由ニ御売可被成下候、尤金子不足仕候へ、私が急度御

勘定可仕候、且海上ニ而難破船濡荷等相成候へ、右掛物之儀は、積合荷物出金之通私が御算用可申候、破船又は火盜荷物皆無ニ相成候得は、同様之相對ニ御座候、為後日為船替取組証文仍而如件

文政十三年

寅八月

紅花為船替主大淀

善四郎 ④

同 桶岡

伝九郎 ④

請人 同

勘右衛門 ④

取次 山形

新兵衛 ④

山形十日町

佐藤利兵衛殿

これは、山形の佐藤利兵衛を世話人として「紅花為船替主」となった大淀村（現村山市）の善四郎と桶岡の伝九郎が、桶岡の勘右衛門（吉田）を請人、山形の新兵衛を取次として佐藤家に出した為替金請取手形である。手形の内容は、(1)佐藤家と京間屋伊勢屋源助との間に、紅花受渡しを条件に組まれている船為替のうち、五丸の紅花を引当に六七兩を借用したということ、(2)この荷物は十月末日まで伊勢屋到着とし、もしそれよりも日数がのびれば、売払いは佐藤家の自由に任かすこと、(3)輸送などにおける諸経費の

不足、とくに海上での濡荷などが生じた場合は、その荷高にに応じて為替金借用主の善四郎らが負担するが、破船や火盗で荷物が皆無となった場合は、為替金貸与者であり荷主である佐藤家と「紅花為替主」であり事実上の紅花出荷者である善四郎ら相方の負担にするというものである。

これによって、在村の小商人あるいは仲買商人は、城下町買次商人佐藤家を通して紅花を京都問屋に移出していたこと、その送り先は、佐藤家と為替関係を結んでいる京問屋が指定され、その荷物紅花は佐藤家の商標がなくとも、佐藤家を荷主として取引されていたとみることが出来る。

以上のような「為替替」関係を通して、山形の佐藤家と系列関係をもつ仲買人は、佐藤家の残存史料で知られる限り、宮崎村の青柳勇蔵、大石田村の須藤久太郎、同二藤部兵右衛門、山形の市村屋人太郎、同油屋長右衛門などの例があるが、さらに広範囲にわたるものであったと思われる。これは佐藤家の場合ではないが、紅花買次問屋と在方商人あるいは買宿が、その輸送にあたっての出判手形は次のような形をとった。

覚

一、紅花式駄也 但拾八入 三箇
拾七入 五箇

右者天童荷主半四郎書面紅花御当所ニ而買調、上方江為差登申度奉存候間、大石田御役所無相違罷通候様、御出判被下置度奉願上候 以上

天童荷主

半 四 郎

長 瀬 宿

善 蔵

同村名主

吉 太 郎

長瀬御役所

表書之通無相違御通可被下候 以上

米津越中守

長 瀬 役 場

(弘化四)

末月廿日

大石田船方御役所

これは天童の紅花買次問屋仲野半四郎の買宿、長瀬村の善蔵から、荷主半四郎分として出荷した紅花二駄について、通行許可の出判を願ひでたものであるが、この半四郎と善蔵の關係は、まさに先の佐藤家と大淀村善四郎の仕入金の前貸による仲買人支配の關係があつたものと考えられる。城下町佐藤家の紅花集荷は、為替業を通して村山地方のみならず仙台領にも及んでいた。

ところで先にもみた在郷町桶岡の吉田勘右衛門は、独立した荷主として紅花を京都に販売するとともに(第4表参照)、山形の佐藤家を通して大量の紅花を京問屋に販売する仲買人でもあった。元治元年五月、吉田が山形の佐藤家に対し、弘化二年より文久三年までの借用金の合計が二、〇〇〇兩に上ったため、預り証文の一札をかわしている。この借金は、「先年紅花・青苧仕入金借用仕、上方為登渡世仕候処、近年損毛打続右大金相崇、家内相続難行立候」ことによるという。この返済についてはとくに具体的な計画はないが、「当年家業出精相働キ、年々御返済可申上候、若返金相成兼候節者、如何様之儀御取立被成下候共、加判之者(忤勘助一筆者)引請急度御返済可申上候」と記している。

桶岡の仲買商人(あるいは二次的買次商人)吉田と城下町買次問屋佐藤との具体的な仕入金関係は、同年九月に、「為船替取組主」としての吉田勘右衛門とその請人勘助が、佐藤利兵衛にだした「為船替借用証文之事」によって知ることが出来る(第4表)。引当商品は紅花と青

第5表 桶岡吉田家(仲買人)の為替借用金

仕込商人先	商標	品名	個数	借用為替金
京都 近江屋 佐助	国	大吉 丸	5	計 93丸 (800両)
〃 伊勢屋 理右衛門	〃	大熟 仁外3	17	
大阪 河内屋 藤兵衛	〃	初音	4	
京都 近江屋 治右衛門	〃	錦木 外1	8	
〃 吉文字屋 彦市	〃	紅輪 外2	14	
〃 伊勢屋 源助	〃	金剛	5	
〃 西村 清九郎	〃	玉色	5	
〃 最上屋 喜八	〃	小姫 外5	18	計 8丸 (60両)
(京都 近江屋 治左衛門)	〃	金 鈔	8	
(大阪 河内屋 藤兵衛)	〃	麒麟	8	
京都 伊勢屋 源助	〃	仙司	4	計 10丸 (100両)
〃 近江屋 佐助	〃	仙光	4	
大阪 羽州屋 久右衛門	〃	日本一	4	計 4駄 (70両)
〃 近江屋 太右衛門	〃	一ツ撰	6	
(向先商人名略・5人)	〃	撰苧	4駄	計 20〃 (150両)
		疊苧	20〃	
合 計	(ママ)	紅花105丸, 乱花6丸, 青苧24駄		1,180両

注 佐藤利兵衛文書、為船替借用証文之事、(元治元)

芋で、荷受問屋は、紅花が京都・大阪の商人一三人、青芋は五人で、その金額は紅花一〇五丸（約二六駄一九）と乱花六丸で九六〇両、青芋が二四駄で二二〇両となり、その仕入金の合計一、一八〇両に上る。この仕入金に対する引当荷物は、「右荷物右名前の方へ為御登被下候付、十一月卅日限り右名前之宅ニ当引商金元利引替、荷物無相違受取可申候」としてある。さらに輸送の限月が守られなかった場合、途中に事故があった場合の条件は、先の大淀村善四郎の場合とはほぼ同じであるが、海陸における「火盗難破船」について、その処分の仕方は佐藤家の勝手とし、途中事故による負担については、「貴殿江聊御損毛相掛ケ不申」とあって、善四郎の証文にみられた海上事故などによる荷物皆損の場合の相方負担の契約はない。一方「為替金元利御手取可被下候余金も在之候へハ、御戻し可被下候、引当金不足仕候へハ、急度勘定可仕候」とある。つまり佐藤家からの仕入金借用の引当は、借入金元利相当の京問屋などへの紅花および青芋を出荷することによって決済されるのである。佐藤家の仲買人などに融資する為替金は、上方からの移入物資に対して組まれているものである。ともかく吉田家が借入金返済に詰ったのは、紅花の不作などで、年々仕入金相当の出荷ができなかったところにあった

のである。また紅花の販売価格、あるいは輸送に要する諸経費のかかり具合によっては、返済金に過不足が生ずるわけで、その場合は戻し金あるいは追加負担を行なうこととしている。とくに輸送の経費あるいは事故について、皆損の場合は相方の負担であっても（大淀村善四郎の例）、一部の場合はすべて仲買人（買宿）が負うことになっているが、これは仲買人（ここでは買宿―二次的買次商人）にとつて、その危険率からいっても重大な問題であつたであろう。

在郷町楯岡の買次商人あるいは仲買人吉田は、荷主として独自に京問屋へ紅花を販売した。例えば弘化三年、京問屋最上屋喜八に販売した一例をみると、^⑧印紅花一〇丸の代金一五二両と銀三匁のうち、仕切限月の五月晦日前に最上屋は、歩引き・手板不足を差引き一四一両余を山形の長谷川吉郎次へ為替金として渡している。そこで限月に吉田に払った残金は九両一歩余であつた。^⑨つまり吉田は、直接の紅花仕入金として長谷川から借用していたのでなく、何らかの関係で紅花仕入が行なわれる以前か以後に借用したこの一四一両余を、最上屋を通して返したか、あるいは長谷川を通して代金の一部が吉田に支払われたかのいずれかであろう。

在郷町買次商人吉田家の存在形態を明らかにする史料は

いまのところみていないが、在郷町長崎村の豪商柏倉文蔵家の紅花取引について分析した井上準之介氏の労作は、この場合多くの示唆を与えてくれる。井上氏は、天保年間の史料にみられる「注文紅花」、つまり京問屋の前渡金による紅花仕入の方法から、同家の仲買人を通しての仕入値段は、出荷値段にほぼ近いという結果を導かれ、柏倉家は、一定の口銭をとって委託販売を行なう仲介業あるいは買次業的在方荷主の役割を果しているものと評価している。一方注文取引によらない紅花の出荷の場合には、山形商人¹¹が替業を通して集金するという形式をとり、金融的には山形商人と密接な依存関係にあることを指摘している。

柏倉もおそらく吉田も、在郷町における買次商人あるいは在方荷主として、在村的な在郷商人ではなく、いわゆる前期的商業資本として城下町商人と同質であるが、しかしまた一方彼等は、紅花集荷問屋で替業を営む山形の有力な城下町商人の系列下にあり、多大の金融の利息を支払うという依存・支配の側面があることに注目すべきであろう。したがって在村の小商人は、二重・三重の圧迫を受ける事情があったといわなければならない。

ともかく、長谷川家にしても佐藤家にしても、山形城下町の有力商人の多くが、買次問屋であるとともに、それよ

りも大規模な荷主問屋であり、また為替業を営むということは、京や大阪商人との間の信用取引を広範囲に行なう商圏をもっていたということである。山形商人の取扱物資がいかに多いかは、天保末年の記録に「山形城下至而繁昌御座候間、凡近国之諸品悉く山形へ持出し、又上方或者江戸其外之諸品に而も一旦山形へ着荷之上近国へ売捌相成候云々」とあることによってもうかがわれる。上方移出の紅花はもちろん、上方からの移入品である古手・繰綿・塩その他多量の日常消費物資が、同じ城下町商人によって取引されていたことはいうまでもない。このような送り荷と帰り荷を背景に、大型の信用取引、すなわち為替取組が行なわれていたのである。そして、上方から購入された日常消費物資が、城下町や在郷町、とくに山形城下町を結節点として、町方問屋商業資本の支配のもとに、仲買人・小商人を通して郡内農村にもたらされるという流通関係が、幕末においても強力に存在していた点を見逃がしてはならないであらう。

注① 長谷川吉郎次は、前述の通り、山形藩士格御用達五人衆の

一人、慶応三年の調達金割当では、城下町商人で最高の一万

二、〇〇〇両、明治八年の立付米は一、一〇〇俵であった。

また、明治十七年の地価金は、隠居分家を含わせ、二万四、

七五七円余で、山形では第一位となっている（地価金五百円以上所有者取調表）。

② また最上紅花の大部分は、およそ、上郷―（陸送）―大石田―（最上川）―酒田―（海上）―敦賀―（陸送）―琵琶湖―大津―（陸送）―京都というコースで運ばれたが、海船中の紅花の所属を知る一つの史料として、天保六年閏七月「松前江差、山本林右衛門船」が破船したときの「積入控」は、その荷主や買次商人の出所を知る上で興味深い。まずこれによって知られることは、山形の福島・村居・佐藤・長谷川などの大商人

第6表 破船史料にみる紅花荷主と買次商人の出身地

地	名	荷主	買次商人	紅花取扱量 (荷主中心)
山	形	5人	8人	93丸
天	童	2		13
沢	畑	1		6
橋	岡		1	
大	田	1		4
天	神	1		
仙	瀬		2	
台	金ヶ			
京	都	6		77
近	江	4		70
水	戸	1		30

注 合計299丸（ママ）、うち49丸は仙台紅花、代金3876両と53匁16となっている。

は、いずれも荷主であること、また京都・近江商人の直買（注文取引）分も多いが、それらの大部分の買次商人は山形に集中していることである。これらの買次商人は、西尾伊兵衛・山口甚兵衛・後藤小平治・鈴木彦兵衛など中位の問屋商人が多いとみられるが、ともかく、荷主および買次商人が、ほとんど山形に占められていたことが知られる（二藤部文書）。

第6表は、梅津保一「近世後期における東北・関東の紅花流通の一考察」（歴史の研究一一号所収）所載の第四表をもとに作成したものである。

③ 佐藤家文書。

④ 二藤部文書、「諸方出判写」（天保八～嘉永二）、山形市史編集資料第一三号所収。

⑤ 二藤部文書、「御徳名前并問屋名前留」によると、佐藤利兵衛殿宿、一ノ関地主町、白土屋治左衛門と記されている。長谷川吉郎次の買宿は、村山地方の外、他領にも及び、はっきり明記したものだけで、奥仙山ノ目駅鈴木庄左衛門、仙台水沢大町小沢屋平治、一ノ関大町造出し、千葉新助などがみられる（前掲十三号所収）。

⑥ 佐藤家文書、「預り申金子之事」（元治元年五月）。

⑦ 最上屋文書、「仕切下書帳」（弘化三年）。

尾張屋伝九郎殿

御支配人

吉田勘兵衛殿

閏五月晦日限

金五拾貳両がへ

一金百五拾貳両

三匁也

三匁也

拾九入 八丸

拾八入 貳丸

右之内

金 貳両一步 歩引

四匁四分八

銀 貳匁 貳厘 手板不足

閏月前日

長谷川吉郎次殿へ

為替金相渡ス

百四十三兩貳歩 六匁五リン

差引

金 九兩一步 壹匁

五月晦日

殘金 九兩一步 壹匁

吉田勘兵衛殿 相渡申候

⑧ 井上準之介「近世後期の紅花生産について——出羽国村山

郡長崎村柏倉家を中心として——」(国際商科大学論叢・創

刊号)。柏倉家の仕入先は、長崎村およびその近在の在村の

千花仲買人で、文政二年の「紅花仕入帳」には延四一人、天

保四年七月の「注文紅花諸品書留帳」における西村屋清九郎

注文分では、長崎口の一九人をはじめ合計五〇人と外に楯岡口一三八袋を集めていた。

千花加工の農村導入も広まりつつあった天明年間の目早

(仲買)についての記録に、「目早渡世之儀は、商人衆中の

仲立致し、大前之金子等相任せ候商売」といい、また「商

取組の手付金並びに取引金等一金たり共自由いたし、商人衆

より断りを請け候へ、仲間相除き云々」という規定を設

け、「問屋付」という関係から自立できなかった様子が、い

わば在方仲買の成長期の問題としてよみとることができ

る(山口村・阿部家文書、「乍恐以書付奉申上候」、山形市史

中巻六〇一〜四頁)。また天保末年の書上では、「山形表御産

物廻漕取捌方之儀者、第一最上紅花と号、近国迄一円に仕付

売買に相成」とあり、そこには目早が約六〇人もあつて、荷

主の「手先」として活動しているの、他國からの売人ある

いは買人は、その相場に惑わされ、極めて不利であるとのべ

ている(「山田幸右衛門江相渡候 山形御産物廻送之儀ニ付書

付」(山形経済志料 第一集)。

⑨ 前掲、『山形経済志料』第一集所収史料注(8)に同じ。

四、結 び

明和二年、京都十四軒問屋仲間の廃止以後、再び京問屋の手代などが競って産地に赴き、前渡銀による仕入方法

が、広く在方商人との間に行なわれたと考えられるが、しかし、町方の買次問屋あるいは集花問屋を中心とする流通が以然として支配的であり、また強化されている点を見のがすことができない。つまりその頃から、農村における干花加工の発展は、在方仲買人の成長を促したが、同時に城下町・在郷町に、有力な紅花集荷問屋および買次問屋が発展していた。そしてこれらいわゆる地方都市問屋は、新しく発生した多数の仲買や目早を買付人あるいは買子として、紅花集荷機構を組織していたのである。

京問屋は、このような紅花生産地に対して、その問屋資本―仕入金を投下し、注文取引・産地買いを広げようとしてはいるが、城下町の紅花問屋を中心とする大規模荷主から、大量の干花を荷受けするという「相対売」を、より支配的な取引方法にしていたと考えられる。そこでの京問屋の利益は、口銭化した歩引と資本の回転による利息の收取に限られるが、遠隔地間の価格差を利用して、危険ではあるが莫大な利益をあげる仕入方法よりも、少くともより確実な方法で利益をあげることに、より比重を置いていたといえよう。そしてそのことは、輸送における危険、あるいは相場変動の大きい紅花という染料商品としての条件もあったが、とくに、生産地における城下町商人の発展を背景に

していたというべきであろう。上方中央都市商人と地方都市商人との大規模な信用取引の關係がそれを可能にしたともみることが出来る。

幕末期における紅花流通を以上のように理解すると、例えば、弘化四年の山形藩における紅花などの専売制計画の失敗、その背景に關係する従米の見解についても、再検討を加える余地があるであろう。もちろん、在村商人あるいは仲買人の存在形態、およびその町方集荷問屋との關係の分析も、残された今後の課題である。

(昭、四六・一二・二五稿)

△追記▽

本稿は、昭和四十六年度東北史学会大会（於東北学院大学）におけるシンポジウムの共通テーマ「近世東北における都市と農村」について発表した問題提起のうち、とくに後期の城下町商人の存在形態を中心に、その後の分析を加えてまとめたものである。

本稿に主として使用した佐藤利兵衛家文書の利用については、現在の当主佐藤利兵衛氏に格別の御好意をいただいた。また、史料採訪に同道された山形大学、工藤定雄教授の御助言に対して、ともどもここに記して感謝の意を表したい。